人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

長崎県五島市

○学校名

長崎県立鶴南特別支援学校　五島分校

○学校のＵＲＬ

http://www.news.ed.jp/kakunan-ss/gotou_b/

２．学校紹介

○学級数

【小学部】６学級【中学部】３学級【高等部】５学級　【合計】１４学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】３４人（平成２７年１１月１２日現在）
（内訳：小学部 10 名、中学部 5 名、高等部 19 名）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
児童生徒が自己の能力や個性を発揮し、一人一人がそれぞれの自己実現と社会参加を図るために必要な知識・技能・態度及び習慣を育成する。
【人権教育に関する目標】
・　命　　：一人一人の命を大切にする心情を育てる。
・　協　　調：他者と互いに協力して行動する態度を育てる。
・　社会規律：学校や社会のきまりを守って生活する態度を育てる。

○人権教育に係る取組一口メモ

協力的な学習や体験的な学習を通して、友達や自分の良さを知り、適切な人間関係をつくる。

○人権教育にかかる取組の全体概要

・　学校の教育活動全体を通じて実践する。
・　人権ＷＥＥＫの設定と、人権集会の実施。

３．特色ある実践事例の内容

【取組のねらい、目的】

- 人権についての話やゲームを通して、ルールを守りながら友達と仲良く協力することの大切さに気づく。
- 相手の気持ちに合わせたり、コミュニケーションをとったりして、友達との適切な関わり方を身に付ける。
- 友達の良いところを見つけるとともに、自分の良いところを知る。

【取組を始めたきっかけ】

自分のことが中心となってしまう児童生徒に対して、人に気づき、人との関わり方や気持ちを考えることができるようになってほしい、相手に対して思いやりの気持ちをもって関わるようになってほしいという教師の願いから、平成２５年度から取り組み始めた。

【取組の内容】（具体的な事例ないし実例に沿って御記載ください）

- 「なかよく運ぼう」（平成２５年度）

→　同級生ではなく、上級生と下級生でペアをつくり、一個のボールを相談して選び、新聞紙の上に乗せて運ぶゲーム。勝ち負けを決めるのではなく、二人で協力している場面や新聞紙を破らずに運ぶことができたこと、相手に優しく声をかけている場面、笑顔で取り組んでいることなどを評価する。

※キーワード：『友達と一緒に、協力、なかよく、あわせる』

- 「振り返ろう」

→　キーワードや児童生徒の発言を模造紙に書き込み、振り返ることができるようにする。

- 「ＵＦＯ新聞紙ゲーム」（平成２６年度）

→　５人組になり、１人が新聞紙の中央をくり抜いた部分に入り、残りの４人が四隅を持ち、破れないようにゴールまで移動する。

ゲームを通して、移動するスピードを合わせたり、声をかけ合ったりしながら取り組むことができたかを見つけたり考えたりする。

・　「友達の良いところを見つけよう」
　　→　人権ＷＥＥＫの期間、友達の良いところを見つけたら、カードに記入しておく。
　　２回目の人権集会時に、児童生徒一人一人の『良いところの木』に、自分のことが書いてあるカードを貼り、各グループで内容を共有する。

【取組の主体や実施体制】
・　生活部が主体となり、小学部・中学部全児童生徒で取り組んでいる。

【取組の頻度】
・　１１月下旬に「人権ＷＥＥＫ」を設定し、その初日と最終日に人権集会を１回ずつ行っている。

【取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫】
・　「人権とは何か」ということを児童生徒に分かりやすく伝えるためにどうしたらいいかを考えることが難しい。
　→　・　グループ分けやキーワードなどを模造紙に書いて掲示しておくことで、誰とペアになるのか、どんなことに気を付けるのかなどを集会の前から意識しておくことができた。集会後も、良かったことなどを書き加えて掲示したことで、それを見た教師や保護者から更に褒められ、自尊感情を高めることにつながったと思われる。（平成２５年度）
　　・　自分の幸せ（楽しいとき）はどんなときか、友達が困っていたり悲しんでいたりしたらどうするか、どんなふうにしていったらいいのか、ということを、絵や写真も入れながらイメージしやすく、分かりやすくなるように、パワーポイントを作成した。（平成２６年度）

４．実施する際に生じた課題及びその解決策

・学級集団によっては、「友達の良いところ」を探すことが難しい。特に、小学部低学年にとっては、自分のことを振り返ることが中心であり、友達のことに目を向けて考えることが難しかった。
　→　・　タブレットＰＣを使って、友達の様子（写真）を見せ、目に見える状況を答えられるようにした。

・グループによっては、リーダー的な役割となる児童生徒の障害の程度が重度の場合もあり、すぐに活動に入れないグループもあった。
　→　・　教師が支援をしながら活動した。

５．実践事例の実績、実施による効果

- 集会後、ペアで給食を食べた。ふだんは多くの児童生徒が食べることを優先させるが、この日は「楽しかったね」などと声をかけながら食べる姿が見られた。
- 友達から自分の良いところを見つけてもらうことを喜び、掲示物を指さしながら書いてあることを確認する姿が見られた。
- 友達の良いところを見つけることで、周りの友達（人）を見ることや自分の行為や行動を振り返ることにつながった。

６．実践事例についての評価

- ふだんはゲームを早く終わらせて勝ちたいと思う児童生徒が、友達のペースに合わせたり優しく声をかけたりすることができた。笑顔で活動する姿が見られるなど、友達と一緒に活動することの楽しさを感じることができた。
- 「人権ＷＥＥＫ」を設定したことで、友達の良いところを積極的に見つけようとする児童生徒が増えた。
- 誰かが見つけた自分の良いところを聞くことで笑顔になるなど、自尊感情を高めることができた児童生徒が数多くいた。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

長崎県立鶴南特別支援学校　五島分校
人権についての話やゲームを通して友達と仲良く協力することの大切さに気づかせる取組、友達との適切な関わり方を身に付ける取組が、丁寧に紹介されている。「新聞紙の上に載せて運ぶゲーム」など、楽しい中にも協力することの大切さを実感できるアクティビティ、「友達の良いところを見つけよう」というカードづくり、「友達が困っていたり、悲しんでいたりするときどうしたらよいか」というテーマのパワーポイントを作成する活動など、児童生徒が主体的に活動し、人権尊重の大切さを実感できるよう工夫されている。「自分のことが中心となってしまう児童生徒に対して、人に気づき、人との関わり方や気持ちを考えることができるよう」（取組を始めたきっかけ）という学校、教師の願いにもあるように、特別支援学校にとどまらず、広く人権教育の基盤を支え育てる取組事例である。